

第7講 後期ヘラディック期（ミケーネ時代）：前 1600～1065 年頃

- 1) 考古学的には・・・堅穴墓・ソロス墓の出現 }
豪華な副葬品（黄金製品等） } 王朝の出現
2～3 世代使用
王宮の出現
遺跡数の増加
↓

このような文明発展に対する従来の説：

アカイア人の侵入と征服（前 1600 年頃）

現在：文化的連続性の強調

黄色ミニュアス式土器：後期ヘラディック期でも制作

堅穴墓の起源：中期ヘラディック期に遡る

- 2) 花粉からは・・・イネ科の雑草 }
穀物型イネ科 } 増加→活発な牧畜
ヘラオオバコ } 増加→牧畜の活発な活動
ナラ } 減少 }
ゲンゲ } 増加 } 森林伐採と土地開発の活発化

全体として地中海農業の特徴であるオリーブやブドウの花粉の欠如

今日の地中海地方の風景を特徴付けるマツの欠如

（ダイヤグラムに現れるのは遠方より風によって飛ばされて来たもの）

- 2) 文献史料によって明らかにされて来たもの

伝承と神話：同時代のもではなく、後世のギリシア人が想像した世界

過去の記憶

ホメロス 『イリアス』・『オデュッセイア』

ヘシオドス 『仕事と日』

粘土板史料

同時代の公文書

行政経済関係

偶然に残存

解読と解釈が必要

依拠するモデルによって歴史家の側の読み込みが行われてしまう可能性

ミケーネ社会と国家モデル

古典学説：アジア型の官僚制を伴う専制国家

ヴェントリスやチャドウィックの方法論

H. D. チャドウィック、『ミケーネ社会』、安村典子訳（みすず書房、1983）

ミケーネ社会や国家をシュメールやウガリトなどの西南アジアの都市国家やヒッタイトの兵士の所有地を巡る封建的諸関係と比較。

太田秀通の方法論

太田秀通、『ミケーネ社会崩壊期の研究』、（岩波書店、1962）

マルクス主義歴史観によるミケーネ社会と国家理解。

ポリス社会に先行するミケーネ社会はより原始的な形態を留めたアジア型の社会でなければならないという理解。

ウェーバーの翻訳が出たばかりの論文『古代農業事情』の序説に展開されている国家モデル「官僚制を伴う都市王制」を援用。

家族形態はアジア型の大家族と古典古代型の小家族の中間的形態をとっていて、拡大家族の形態がミケーネ社会を特徴付けていた。

シュメール研究者前川和也の批判

前川和也、「シュメールとミケーネ」『京大人文学報』32（1971）

アジア型というには宮殿経済の規模が余りにも小さすぎる

宮殿が所有する家畜の規模が桁違いに小さい